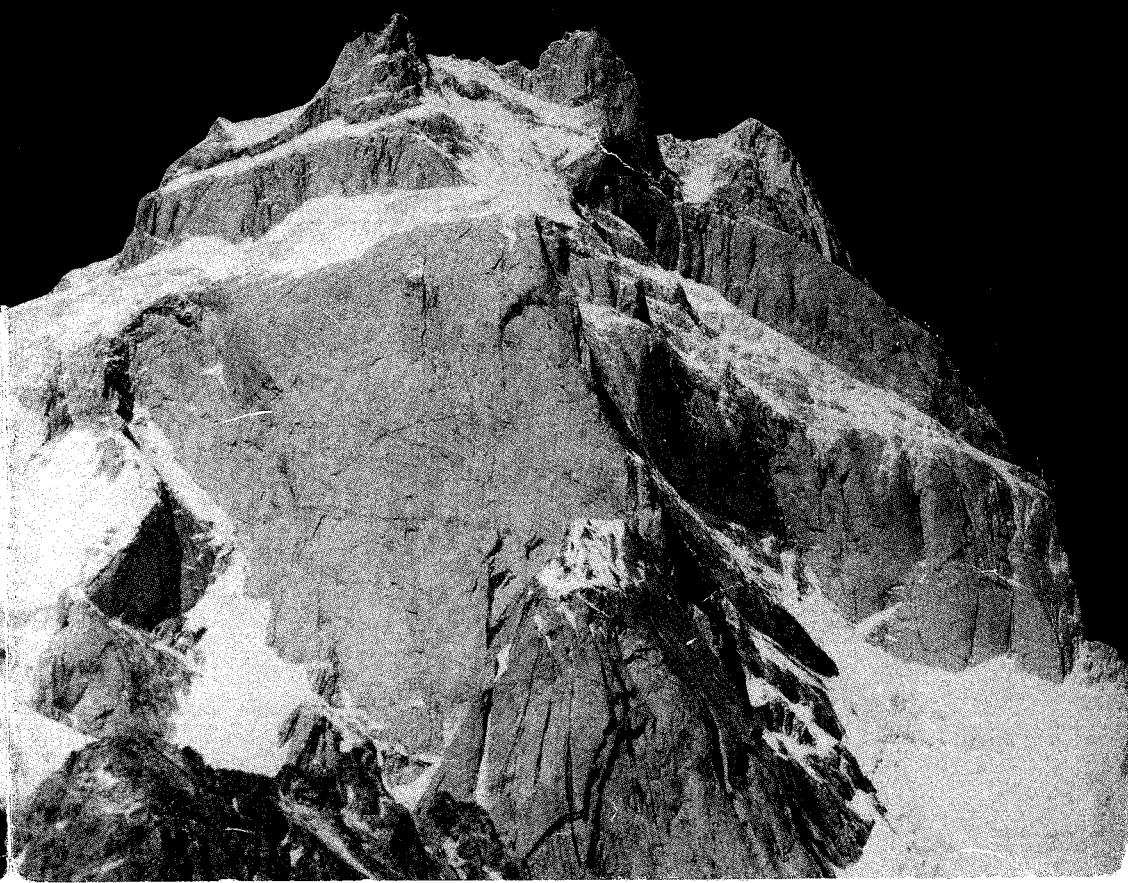
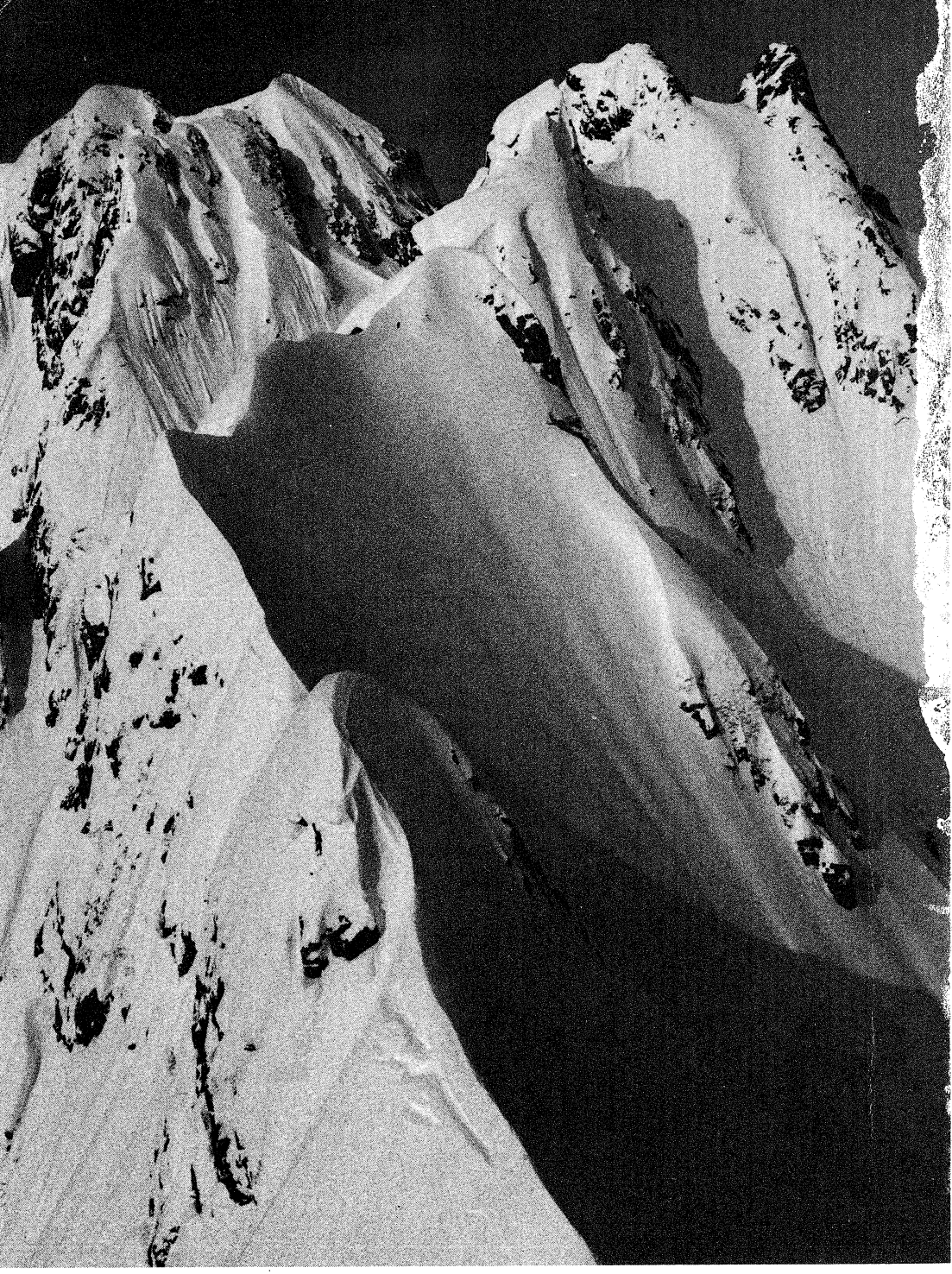
朝　霧

東京朝霧山岳会

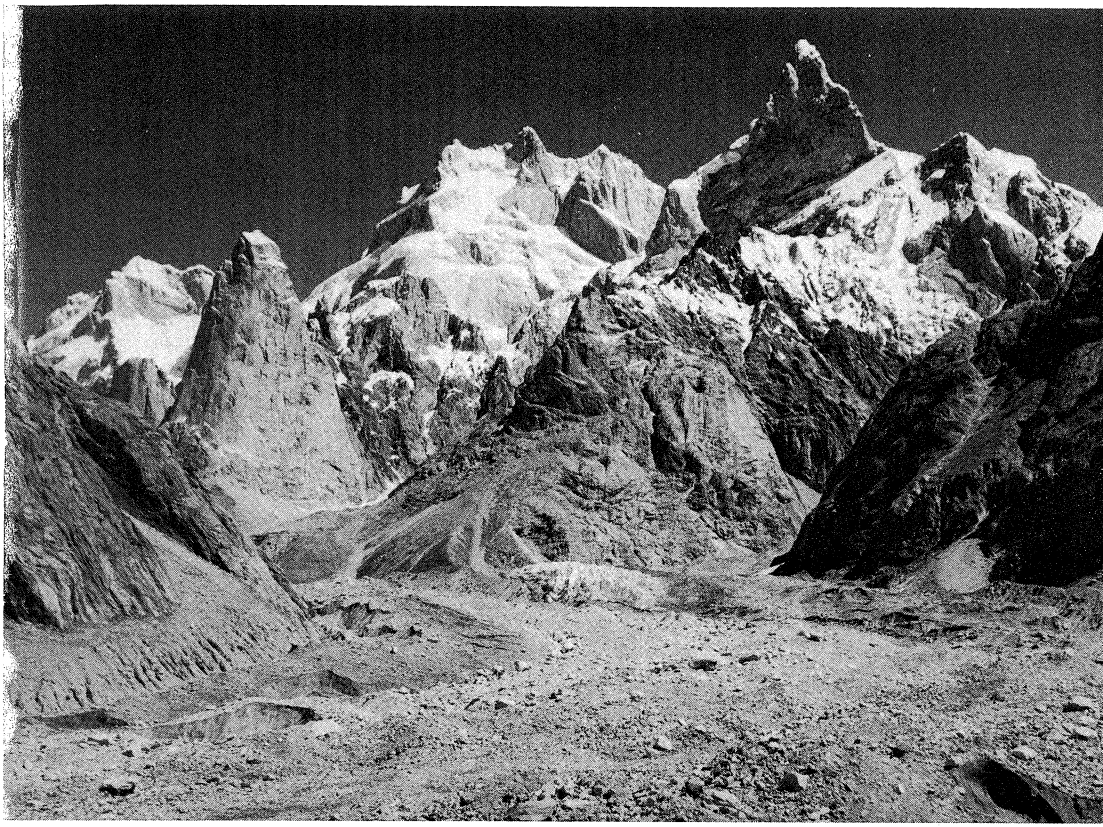


朝霧

創立五十周年記念



剣岳八ツ峰六峰より



ウズンブラック氷河よりバインターブラック 7285m
1976年7月撮影

目次

祝辞……1
創立五十周年を迎えて……東京朝霧山岳会　会長　山中直行　2
半世紀の一角に立って……東京都山岳連盟　会長　斉藤一男　4
新らしい「前進」を……元東京都山岳連盟　会長　小島六郎　6
五十周年まことにおめでとうございます……東京都山岳連盟副会長　東京岳人倶楽部　石田稔郎　7
下町五十周年おめでとうございます……東京都山岳連盟副会長　好山会　小林勉　8
五十周年記念を祝し明日の歩みに期待しつつ……Bush山の会　山本久子　9
半世紀の年輪・その展望……11
揺藍時代（昭和九年～十九年）……夏井健之　12
新生時代（昭和二十一年～二十九年）……斉藤一男　14
転換時代（昭和三十年～四十年）……梶山幸佑　21

激動の時代（昭和四十年～四十六年）……海老沢　道夫　41
現　代　(一)（昭和四十七年～五十一年）……西原　正　51
現　代　(二)（昭和五十二年～五十七年）……植田　宗男　59
開拓の記録……67
武甲山北面研究……研究部　68
越沢バットレス……指導部　84
衝立岩正面壁……梶山　幸佑　85
コップ状岩壁正面ルート（仮称）試登……高野　一義　89
剣岳八ツ峰側壁……90
北岳バットレス第四尾根直登ルートの開拓……梶山　幸佑　93
国内主要記録……113
谷川岳一ノ倉沢滝沢積雪期初登攀……原田輝一・吉尾　弘　114
谷川岳一ノ倉沢二ノ沢左俣積雪期初登攀……吉尾　弘　120

明神岳五峰下宮川谷奥壁初登攀……大西嘉彦 123
北岳バットレス中央稜積雪期初登攀……吉尾弘 127
剣岳チンネ正面壁積雪期初登攀……吉尾弘 133
積雪期北岳バットレス第四尾根……田中浩司 140
積雪期一ノ倉烏帽子沢奥壁変形チムニールート初登攀……山口要 144
積雪期穂高屏風岩中央カンテ初登攀……吉尾弘 147
谷川岳一ノ倉沢コップ状岩壁ルンゼルート積雪期第二登……外村英一 160
谷川岳幽ノ沢中央壁積雪期初登攀……田中浩司 164
積雪期後立山連峰縦走記録……170
北岳バットレスピラミッドフェイス初登攀……海老原道夫 198
北岳バットレス第四尾根ピラミッドフェイス冬期初登攀……西原正 201
積雪期北鎌尾根……海老沢政夫 208
一九七八年冬剣岳小窓尾根……213

一九七九年冬剣岳八ツ峰～小窓尾根……218
甲斐駒ケ岳北坊主の沢冬期単独登攀……川内盛雄 228
国外主要記録……233
ヒンヅーラジ・一九六七年……海老原道夫 234
コーカサス遠征……福岡璋祐 244
ハヌマンティバ北稜第二登……海老原政夫 254
バインターブラック七二八五メートル……西原正 261
当会の遭難について……前野忠保 276
東京朝霧山岳会遭難救助史……279
歴代会長名……283
編集後記……梶山幸佑 284

東京朝霧山岳会カラコルム登山隊報告書

―バインターブラック 七、二八五メートル―

西原 正

隊員構成

隊長　西原　正　三十才
渉外　植田宗男　二十九才
食糧　吉田英樹　二十七才
装備　山口秀男　二十五才
会計　村島雅博　二十六才　リエゾンオフィサー
梱輸　鈴木利一　二十九才　シードゥ・アテック・ラーマン
医師　小川武希　二十五才　コックーコルバーン

行動日程

○五月三一日　隊員七名、羽田出発、ラワルピンディ着。
○六月二五日　スカルド着（三週間フライト待ち）
○六月二九日　バッハより七〇名のポーターと共にキャラバン開始。
○七月六日　BC（四〇〇〇m）設営
○七月一〇日　C1（四六〇〇m）設営
○七月一九日　C2（五二五〇m）設営
○七月二四日　仮C3（五五〇〇m）設営
○七月二八日　ビバーク地（五六〇〇m）設営
○七月三〇日～八月五日まで悪天のため停滞
○八月一二日　C3（六三〇〇m）設営
○八月一四日　西峰ショルダー（仮称）六七〇〇mまで偵察
○八月一六日～悪天候の中ルート工作、荷上げ、停滞の繰り返し
○八月二四日　C4予定地（六六〇〇m）、ルート工作完了。

○悪天候、停滞
○八月二七日　登山中止決定
○八月三〇日　全員BC集結
○九月一日　ラトックⅡ峰隊、ポーター一五名と共に帰路キャラバン開始
○九月一〇日　スカルド着
○九月一九日　ラワルピンディ着
○九月二三日　現地解散

一、発想から出発まで

朝霧の会員は過去に合同隊員として参加しているけれども、会単独ではヒマラヤを計画、実行できないものがあった。

僕自身、過去に冬期アンナプルナ南峰、アンナプルナⅢ峰と次々に持ち上った計画は個々の理由で中止、消滅していった。

そして今回の遠征の話がもちあがったのが一九七四年の秋頃であった。

当時強力なパートナーであった庭野とヨーロッパやヒマラヤの話をしていると、我々の手で遠征を実現したいという気分になってきた。その後一九七五年二月に具体的に決まらないまま、海老原道夫を委員長にして候補者や遠征経験者が中心になり海外委員会が正式に発足した。

度重なる委員会を進めていくうちに、この一～二年で解禁になったカラコルムにしぼられてきた。そして登るべく条件としては、先ず未踏峰である事、七〇〇〇mの高さをもつ事、探検的な要素が残されている事、等を検討していくうちにカラコルム中西部が選ばれ、ウルタル、七三八八m、バインター・ブラック・七二八五m、ゴズ・サール、六六七七m、ルプガル・サール七二〇〇m等の未踏峰が候補として上った。

その結果、フンザへの入域、等のいくつかの諸問題をかかえているが、未知の要素をふんだんにもっている、シムシャール河流域に聳えるマラングッティ・サール（七〇二五m）を第一候補に上げることが決定した。

また、政治的理由で入域できない場合を考えバインター・ブラックを第二候補、そしてカラコルム西端のコズ・サールを第三候補に上げそれぞれ申請をした。

難渋ではあったが九月になって計画書の第一稿が上るころになって、この計画を共に推進してきた庭野が業務の都合で海外へ長期出張を命ぜられ参加出来なくなったことはメンバーにとってすくなからずショックであった。

種々の準備を進めていく中に、一九七六年二月になってパキスタンから「国内事情により」という事で第二候補の「バインター・ブラック」七二八五mの許可が降りてきた。

「これを登るのか!!」
別名「人食鬼」と呼ばれているこの山は、過去何隊かのアタックをことごとく退りぞけたバインター山群を形成する盟主として聳え立っている難峰である。
入手した写真を見ながら深い溜息と昂奮と共に生来の闘争心が頭をもたげてくるのだった。そしてこの山域の精通者として知られる立教の高橋、静岡の勝見、群馬の奥原氏らより資料、写真等を拝借し連日検討会が開れた。そして翼を広げた城塞のようなバインター・ブラックの岩壁の直登をさけ、西コルに達する南西稜（仮称）にルートを取ることに可能性を見いだした。
五月の連休を利用しての買出、梱包も五月中旬にはすべて完了し、隊員七名は五月三一日のフライトを待つだけとなった。

キャラバン

六月二十八日　スカルド〜バッハー
いよいよ夢にまで見たキャラバン開始地バッハーへと、ジープ一台、トラクター二台にて出発する。しかし、「夢と現実とは一致しない」という世のたとえ通り、一兵卒の私が乗るトラクターは、最初ははずみすぎるのでおもしろかったが、まず一時間位で砂漠地帯に入るとすごい砂ぼこりで、頭にはターバン、鼻と口にはタオルで覆ったが全くきき目なしで全身真白。シガールを過ぎると木立の道であるが、出発より三時間もすぎたこの頃より、腰は痛いし、手の皮はすりむけるし、プロレタリアの私でさえさすがにうんざりしてきた。それでもなぐさめは、屋根道を越す度に氷河を抱いた山々が見えた事だ。夜私は腰の痛さにうつぶせで寝る羽目となった。
六月二十九日　バッハー〜ダッソー
七〇名のポーターと共にカンカン照りの中、桑の実を食べたりして一時間十五分の道程でダッソーに到着。
六月三十日　ダッソ〜チャポ
五時のポーター出発迄、我々が朝食をして梱包を終えなければならないのであわただしい。一時半チャポ到着。炊事用のマキを近くから採ったが、村人から金をよこせと言われたのにはびっくりした。
七月一日　チャポ〜チョンゴ
途中、三〇〇ｍの急登あり、温泉ありで、楽しい道程。チョンゴでＲＣＣⅡのムスターグタワー隊と出合う。あとわずかで敗退とか、しかし、三ｔの荷を一ｔ削ったとは恐れいった。
七月二日　チョンゴ〜アスコーレ
日本の景色かと間違うばかりの、田園風景の中を歩くので中々あきない道程だ。しかしこんな奥地でも、子供の写真を撮ると金をくれという。これも毎年の数多い遠征隊の影響か。

アスコーレはこの街道人間が住む最後の村で、人口五〇〇人位とか。ここでリエゾンオフィサーの地が出て、天幕がきにくわないので交換してくれと言い出す。

七月三日　停滞

リエゾン・オフィサーの我ままにより、休日となる。

七月四日　アスコーレ〜ナムラ

村より少し行くと河原に出、パイジュの山群が見える。ビアフォ氷河の入口コロホンを過ぎモレーンの中に入る。長いモレーン上のアップダウンをくり返して行くと、突然バインター・ブラックの偉容が目に入り、全員気合が入る。ナムラには夕刻到着する。

七月五日　ナムラ〜ソブロン

右岸のモレーン上を進み、マンゴーを過ぎると、突然左より支流にぶつかる。深さはヒザ上位なのだが、流れが早いし、下方には滝がある。一人で渡渉する者、手を借してもらう者様々である。しかし一名だけ、水所極度恐怖症が隊員の中にいて、二人にささえられ真剣な顔で渡る姿を見て一同大笑いであった。四時右岸のソブロン到着。しかし、後続のポーターが病気で全く歩けずとの伝令が有り、四名のポーターと共に十八時前迎えに出発する。一時間後に現場到着。すぐ様交代で氷河上を背負い歩き、二〇時過ぎソブロンに到着する。

七月六日　ソブロン〜バインター

幅一・五Kmのビアフォ氷河を中央まで横断、アップダウンをくり返し、そして左岸伝いの砂地を進みバインターに到着。BC予定地は五〇〇m先の、ウズンブラック氷河上であるが、リエゾンオフィサーの悪い虫が又々動きだし、この地をBCとするとガンと動かず、しかたなくここを仮BCとする事にした。二名ウズンブラック氷河の偵察に出る。再度交渉の結果、明日からは一五名のハイポーターと共に前進する迄軟化する。明日帰るポーター連中の夜遅く迄の喧噪の中、BC入りと、私の誕生祝いを兼ねて久々のアルコールも入り、各自思い〳〵の胸の内の中で、床につく。

記　山口秀男

行動記録　ベースキャンプ〜キャンプ一

七月七日

「ポーターが一人もいないよ！」

早朝荷物の中で寝ていた吉田が入ってきた。

「本当だ、だれもいない！」

どうしたんだろう？ここは寒いので場所を移動して寝ているのだろうと考えていたら、昨夜一五名に渡した番号札が天幕の入口に置いてある。捜しにいった吉田が一二時頃ポーターが帰って行ったという話を泉州隊より聞いてきた。

一瞬、面喰った。

「そんなばかな！」

今日の日当も先払いさせられたのに……。
二トン近くの荷上を……我々だけで……。
眠気もすっかり醒めてしまった。
朝飯もそこそこにL・Oにポーター脱走の件を話に行く。
その際望みとして二つの条件を提示した。
①最低五名のポーターが必要だ、そのためにコックのコルバンをアスコーレまで連絡に下ろしてほしい。
②コルバンがだめなら泉州隊のコックにたのんでもらえないか。L・Oはコルバンは山が初めてなので①の案は無理、②の案は泉州隊のL・Oに相談して見なければわからないので隊長を通じて話をしてほしいとのこと。
結局答は「NO」であった。これで完全に振りだしに戻ってしまった。隊員を連絡に下す事も考えたが、全員の意見は、独自で上げようという意志が強く、頑張ってもらう事にした。
山口はBCにて荷上品再パッキング、他は一人二〇kgを背負ってBCを出発した。一五分位急登すると眼前に七二八五mのバインター・ブラックのピークが飛び込んできた。今迄のゴタゴタをすっかり忘れさせる素晴しい景観である。全てを忘れて見惚れてしまった。ウズンブラック氷河に入ると植田とはぐれてしまい、ルートを求めウロウロしていると右側に東京同人隊が挑んでいるラトックⅡ峰が見えた。荷物をデポして氷河をつめると我々が登ろうとするバインターの全景が入ってきた。予想した通り、非常に手強い感じがする。三〇分位偵察してBCへ。明日から本格的な荷上げが待っている。

七月八日
L・Oと口を聞くのも嫌になった隊員達はそしらぬ振りして荷上準備に体を動かしている。今日から全員でC1予定地まで荷上だ。昨日苦労したモレーンの中、ケルンを積みながら登ること六時間でバインター・ブラック全景が見えるモレーン上台地をC1（四六五〇m）と決定した。負荷をかけて高地で行動すると隊員の中に頭痛や下痢をする者が出て大変な一日であった。

七月九日
今日は西原、植田、吉田で荷上、他は頭痛者続出のため休養、昨日アルパインロード（？）を作ったおかげで、今日はスムーズにC1予定地へ行ける。行動食が少ないと云っているが豊富にあるわけじゃなし、頑張れ！

七月一〇日
全員で荷上をすると実に楽しい。通い馴れたモレーンでキジを打ったり歯を磨いたりしながら、六時間もかかった道程を早い隊員は四時間位で登ってしまう。このウズンブラック氷河はバインターの他にラトックⅡやバインター前衛峰の高峰があり、又、C1下手に一〇〇〇m以上あるかと思われる

岩塔が聳え立っており、その景観は荷上の苦しさをしばしば忘れさせてくれた。取付ルートも西コルに達する南西稜（仮称）に決り、明日C1を設営していよいよ本格的に取組むこととなった。

帰路、ルート上に緑色のキジが打ってあるのを発見、よく観察すると天幕の周囲にもある。ムースのキジでもない？、泉州の連中に聞くと熊ではないかとの由。まさか四〇〇〇mの高地に熊が出るなんて！、半信半疑でいたのであるが、後にバッタリ熊とお見合いをすることになるのである。

七月一一日

朝から天候の状態があまりよくない。出発しようかしまいか、モタモタしていると泉州隊の隊長さんがやって来た。I峰の登山活動はクーロアールの危険が多すぎて八日の地点で打切り、周辺の調査、試登を行っていますのでL・Oには内密に願いますとのこと、彼らも第一希望の山でないだけに不本意な遠征であると同情にたえないものがあった。

今日からBCとC1に別かれての生活のため、吉田は準備にテンテコ舞いだ。

一〇時、出発しようとしたが雨がパラツキだしたので、西原、吉田、山口を除いて休養とする。一人二五kg近く背負って四時半にC1へ。

置石をならべて設営していた時、突然前にヘタリ込んでしまった。「コ、腰が……」あとの言葉が出ない程の激痛に思わず唸ってしまった。情けない話だが立って歩けない。設営の終った天幕の中へ赤ん坊のように這って入った。

座ることが出来ないので横になっているしかない。吉田も山口も心配してくれるが、どうにもならない。

明日からの偵察、ルート工作、荷上げ……、このまま登山活動が出来なくなったらと思うと不安で頭の中がいっぱいになる。

とりあえず明日の偵察は吉田と山口に行ってもらうことにした。

眠むれない夜をドクターの治療に一途の望みをたくして…。

記　西原　正

C1～C2

七月一二日

吉田、山口二名でC2予定地途中の、アイスフォール帯のルートを見いだすべく、いよいよ本格的登攀活動に入った。C2予定地は、西壁の取付点と見られる顕著な岩稜基部である。予定地迄は、一九七四年の静岡隊が南壁を登るべくして通過したアイスフォール帯より左に横断、インゼルと思われる最初の岩壁帯を越え、雪壁を登って基部に達する。アイスフォール帯での行動の方向づけは、C1西原隊長がプリズムと、トランシーバーによって指示する。アイスフォール帯に

入ると、C1より見たのと大違いで、いたる所でズタズタに切れている。それでも何とかルートを見いだすべく、右に左に進むが、結局大クレバス帯に阻まれ断念する。C1の指示により、アイスフォール帯入口迄戻り、左に大きく廻り込む事にする。四時間半もの苦闘で行動食も食いはたしペコペコ。ウズン・ブラック氷河に戻り、左に進むと地形は一変し、なだらかな雪田となる。氷河より右の雪田を進み、さらに左に、方向を変え雪壁を登ると、クレバスがだんだん多くなってくる。バテバテになりながらも三時半にはC2予定地と思われる岩稜基部に到着。さらに岩稜を右に廻り込み、五三五〇m迄行きC1に戻る。

翌一三日。再度C2予定地に向ったが、基部手前の雪壁で、ヒドンクレバスに落ち、その際左ヒザにアイゼンをぶつけてしまい、六センチ程の裂傷を負ったが何とか歩ける。より安定した幕営地をさがすべく、右に廻り込み二〇〇m程ザイルをフィックスする。一三時三五分、突然「ゴオー」という音、「ジェット機の音かなあ」と思ったら（後で「こんな所を飛行機が飛ぶわけがない」とさんざん馬鹿にされたが、それとも高度障害で正常に思考能力が働らかなかったか）吉田さんが、「雪崩だあ」という声、思わず上を見たらものすごい、もうもうという雪煙が目の前に追ってきた。思わずかけ上り、岩場の下のフィックスザイルにしがみついたが、身体中雪煙をあびてしまった。フィックスザイルがなかったらと思うとぞっとした。どうやらC2幕営地は岩稜基部しかないと判断C1に下る。

一四日より岩稜基部に荷上げを開始、そのつど、雪壁を切り崩す作業を繰り返したが、何しろ五四〇〇m の高度と、チョコレートがドロドロに溶ける熱さの中で二張分の場所を作るのだから大変な作業である。ようやく一九日にC2が建設できた。

PC3～C3

標高差約一〇〇〇m のバインター・ブラック下部岩壁の突破は、我々遠征隊の成否を占うカギであった。

ルートは、当初写真上からも検討されていた西稜伝いのコンタクトラインが選ばれた。そして、西稜取付のC2から下部岩壁を抜け出た大バンドまでの、どこにキャンプを作るかが問題となった。西稜も西稜の右側に位置する右ルンゼにも、キャンプを出せるような場所はどこにもない。しかし、荷上を繰返し乍らのルート工作の結果、西稜上のG岩上部にッェルト位いは張れそうな岩クズテラスを発見したのである。そして、ここをPC3として下部岩壁の突破をはかった。

PC3からは、F岩下端まで斜登である。ここからF岩下岬までF岩下部に打ったハーケンを頼りの水平トラバースになる。ルート工作時には適当であった岩場のハーケンの位置

バインター・ブラック下部岩壁ルート図

バインター・ブラック下部岩壁西稜ルート

0 C2（五二〇〇m）、西稜左ルンゼからの大雪崩の爆風を数回浴びる。
1 グサグサの雪壁の斜登からH岩岬部へ
2 小ルンゼ下のグサグサの雪壁、トラバースからI岩末端
3 下半はグサグサ雪、上半は青氷の中をI岩に添って直上
4 岩場を回り込み、島の様に岩が散在する岩島群へ
5 I岩の中央岬部を回り込み西稜右ルンゼに入る。
6 I岩デポ地。素晴しいテラスで水もある。
7 G岩下端の岬を回り込んでG岩伝いに真上
8 効いていないスノーバーからハーケンのある丸岩へ
9 G岩上部は傾斜も急になる。F岩右大デルタ氷崖が大きい。
10 鷹ノ巣御殿への最後の急登。岩を敷詰めたPC3
11 F岩下への斜登。雪が降ると板状雪崩が出る。
12 岩場へのランニングビレイが高く、苦しい水平トラバース
13 F岩下を下降気味にトラバース
14 氷の張付いた岩をトラバース
15 F岩下岬のデポ地点。ハーケンにブラ下げるだけのデポ
16 F岩下岬を回り込むと大スラブ帯の真下。右側は大デルタの氷崖
17 フィックスが何回も切断された大スラブからの落石帯
18 F岩上岬へのブラックアイスのラビーネンツークを数回横断
19 押し込まれた感じのする長く嫌なラビーネンツーク
20 大デルタの落口からE岩下部へ
21 E岩岬下の楽な水平トラバース
22 E岩岬を回り込んで右ルンゼ上部S字帯に入る。
23 ザクザクの雪壁をE岩に添って真上
24 E岩からD岩への長い長いラビーネンツークのトラバース
25 D岩岬のスラブ帯を直上
26 ザクザクの雪壁をD岩とE岩の間の離岩へトラバース
27 B岩に向ってなおトラバース
28 B岩に添ってB岩岬へ
29 B岩上岬の先端へトラバース
30 S字上端部に入る。
31 A岩下の雪壁をトラバース
32 氷化している所をA岩へ
33 A岩下端のザラ氷の中をA岩先端へトラバース。高度感あり。
34 西稜の上部スノーリッヂに出てスノーリッヂ右側を登る。
35 ズクズクの雪と氷のリッヂを直上
36 西稜最後の岩部に向ってなお直上
37 大ペニテントスノーと不安定なウロコ雪の中を右左。
38 アイスハーケンを経て屋根のような雪庇帯を通過

記　植田

も、日が経つにつれて雪が減り、遙か上方になってしまうのである。この岩との境界にある雪面のユマールによる水平トラバースもさること乍ら、スラブ上方のビナの掛け換えには閉口させられた。このF岩下端トラバースではほとんど全員がスリップして、フィックスザイルにブラ下るといういわくつきのピッチである。

F岩下部岬から上部岬までの間は、F岩大スラブの真下にあたり、岩ナダレの名所となる。我々のフィックスザイルも何度となく切断された。下岬から上岬に移る間のルンゼはブラックアイス化しており、この小さなラビーネンツーク状の氷の川を何本もトラバースして渡らねばならない。また、右側には、右ルンゼの大デルタの氷崖が迫ってきて、このルートの核心部となった。大デルタの落口はさすがに大迫力である。落口横の急な氷雪壁を登る我々のルートに、もし一発でも雪崩が出れば、西稜を仰ぎ見るC1まで一気にダイビングしてしまうことだろう。考えただけでも背筋が寒くなる思いがする。

大デルタを越えると右ルンゼも上半となり、S字状の広大な雪壁になる。この雪壁は、七月二九日に西原、植田、鈴木の三名で、PC3からではとてもA岩上部の雪稜が突破できないということで、氷のテラスを作ってビバークした時に、夜半から降り出した雪により一〇数回にわたる雪崩の襲来を受けたといういわく因縁つきのピッチである。

E岩に添って登るこの広大な雪壁も雪が降らなければザクザクの長い雪壁になり、ただ辛く苦しい登りだけになる。E岩上部で一坦左岸のD岩へとトラバースした後、再び右岸に戻りB岩伝い直上する。この途中にある岩の上を流れる水を空缶に受けて飲むのが、S字部を登っている時の唯一の楽しみである。

A岩下端から西稜上部の雪稜へは、左ルンゼの上部にあたる為に雪も氷化しており、その高度感と相まって緊張させられるピッチになる。西稜上部は、それまでのピンが岩にとられていたのに対して、雪や氷にとられるので非常に不安を感ずる。雪稜が終ると、次は大きなベニテントスノーとウロコ状の大きな雪塊帯に入る。この中を右に左に避けて通ると、上方を5m以上もあろうかと思われる雪庇の屋根に抑えられた内院に達する。

この雪庇は、C1から見ても巨大で大バンドへの出口を全て塞いでいる。ルートは大雪庇と大雪庇の継目のような部分にとられる。荒天の為にルートが伸ばせず、一坦C1に戻って陣営を建て直してから四日目の八月九日、ついに念願の下部岩壁は突破された。登山開始後三一日目であった。

C3へは、雪庇の上の一〇～二〇mはあろうかと思われる巨大なアイスビルディング帯の通過である。C3は、こんな

所にこんなに広い場所があるのだろうかと思う程の広い雪原で、今回のキャンプ地の中で、BCを除けば最も広く安定した所であった。

ここから見上げるバインター・ブラック上部岩壁は大きく、特に夜オリオン座を後に従え、ヌッと立ちはだかった姿は恐怖を感じさせる程であった。

C3〜C4

八月一三日

午後より西原、山口でルート工作に向う。C3よりサッカー場が何面も取れる様な広い雪田を通り抜け、スノーバンドへ上る氷雪壁の取付点に着く。氷雪壁は途中にクレバスが有りその上には露岩も所々にある。西原トップで取付いたが、傾斜のあるクレバスを越すのに時間がかかり、結局この日は一〇〇m延ばしたに過ぎない。

八月一四日

六二〇〇mの朝はさすがに寒い。昨日の地点より上部は氷壁のトラバースで、そして露岩を越え氷壁を登る。一〇〇mでなだらかな雪田となり、遠くからでも見える顕著なスノーバンド迄はさらに二〇〇mで着いた。ルートは此処より、左手の雪壁から西峰ショルダーを越え西峰に至るルートと、右へスノーバンドを大トラバースしてその上の急雪壁を登り、本峰に至るルートと二通りあるが、西峰よりのルートを取った。二〇〇mの露岩混りの雪壁を登り、西峰から一気に切れ落ちている岩壁基部に着く。六七〇〇mはあるだろう。バインター・ブラック北面はすっぱりと切れ、シムガン氷河に落ちている。此処から見るシムガン氷河は真白で、所々黒々としているビアフォー氷河とは対象的である。三六〇度見渡すとはっきりと分かる山々も有り、時が許せば地図を片手にゆっくりと見きわめたいものだ。此処からの西峰へはどうしてもルートが見いだせず、無理と判断スノーバンドまで下降しC3に下る。

八月一五日

スノーバンドの最初は三〇〇m位はやさしいトラバースで支点はスノーバーで取る。その先は傾斜も強くなり、五〇m程は完全な氷壁トラバースとなり緊張させられた。ボルト連打の支点と、セカンドのカッティングによるトレース作りとで三時間もかかり終了。

八月一六日

吹雪の為停滞

八月一七日

昨日と今日の吹雪の為に埋もれてしまった、ザイル堀り起しで一日終わる。

八月一八日

今日も吹雪の為停滞、やはりカラコルム山脈では、「八月

一〇日過ぎると悪天が続く」と言われているのは本当だろうか。

八月一九日～二一日

猛吹雪の為動けず。連日の停滞で登山期間も残す所一週間。隊員一同あせりの色も濃い。C3の荷上げ量で何とかアタックしなければならない。現在C3にいる四名であればまだ可能性はある。

八月二十二日

非常に寒く今日初めて靴下2枚、そしてオーバー手袋を着用する。スノーバンドで吹雪の中、ザイル堀り起しをしたが深い所で一・五mもあった。ルート工作は二時三〇分開始、先日の氷壁トラバース地点より、五〇m斜下降し、さらに氷壁、岩場を一〇〇mトラバースして終了。

八月二十四日

一週間ぶりに天気が回復して、二名でC4予定地のスノーバンド終了点に向って出発。フィックスザイルが所々深く埋もれていて苦労する。昨日の地点より相変わらずのトラバース作業である。五〇m下降すると巾三、四〇mの広い雪田となり、C4予定地に着く。此処から本峰に通じる氷壁の取付は高さ一〇mはあろうかと思われ、垂直となっている。一時間程幕営地を整地して下山に移る。

記　山口

八月二五日

前日、C4予定地まで伸びたルートに今朝はC4を設営すべく天幕を背負って、西原、山口が先行。西峰に怪物の住みかを思わせる巨大な笠雲がかかっている。間違いなく悪天は来るだろう。しかし、少しの好天で行動しなければピークは近づいて来ない。一〇日間も降り続く降雪にC4への荷上はしんどい。C3裏の雪原は膝のラッセルに遅々としてはかどらず、スノーバンド下の氷壁に取りつく頃には雪が舞い始めていた。

氷壁を北面からの風にあおられながら、ヨタヨタ登って行く。悪天の為西峰ショルダー下の岩壁で様子を見ることにした。しばらくすると植田・吉田のパーティがブリザードの中から姿を現わしたが、これ以上の前進は体力を消耗するだけで荷上どころではないので、僕と山口で雪洞ビバーク、植田と吉田はC3で待機するよう決定する。

軽量スコップとコッヘルで雪洞作りを始めると、意外としっかりした雪洞が掘れた。濡れを防ぐ為に洞内を大きくして天幕のポールを張りめぐらせると、C3より快適になった。BCにはL・Oの子守役をしてくれている小川Dr、高度障害の中をC3まで頑張った村島、C1にはダブルボッカまでしてくれた鈴木が、C3には高度障害を克服して頑張っている吉田、アンパンみたいにふくれた顔の植田、相棒の山口はカ

エルのようなセキをして、それぞれが天候の良くなるのをジット耐えて待っている。
外は相変らず吹雪いている。
八月二六日
今日も朝から風雪。
「だめだ。だめだ。今日も停滞。」用をたすのもおっくうだ。六〇〇〇m以上では動かなくても体力は消耗する一方だ。しかし、悪天だからと云っていったん下降したりしたら、再び登り返す気力はあるだろうか？否、耐えて待とう！
朝食は抜く。一〇時頃飯代わりの紅茶を4ℓ沸かして飲む。ここにはC4以上の食糧があり余るほどある。
「何か食イテー！」よせばいいのにC3との交信で、大福が食いたい、寿司が食いたいとないものねだりが始まった。
夕方、BCとの交信で登山期間の再延長をL・Oに頼むように連絡してみた。L・Oが周期的に高熱をだしていることを初めて知らされた。
除雪、ゴロ寝の繰り返しで今日も暮れた。
八月二九日
今日も停滞。C3の天幕は居住性が悪いうえにこれだけの降雪では、除雪に大変だろう。雪洞内も怠けると酸欠になってしまう。朝・昼兼用の飯がわりに紅茶をたらふく飲む。よく入るものだと感心してしまう。
夕方BCとの交信で「登山期間の再延長は認められない。ラトック隊はすでに登山中止を決めてBCに集結して、九月一日に帰路のキャラバンを開始するので我隊も同調するように」との連絡が届く。しかし、
「ここは無理を承知で我々の状況を説明して再度あと一週間の期間延長を申込んでみてくれ。二〇時にもう一度交信をする。」と指示。それから全無線機を開放してミーティングが始まった。C3の植田隊、BPの西原隊、L・Oの連絡を伝える小川Dr・村島・鈴木
「L・Oの下山の意志は変りません。明朝、ポーターを迎えにアスコーレまでラトック隊が行くそうです。それとL・Oの熱は下界に降ろさなければ、下がらないので医師の立場として、これ以上続行の進言はできません。」
いくら頑張って頼んでも……ダメか！
ハラは決った。しかし、ここまで頑張ってくれた隊員の気持を整理する時間は必要だ。
「全員、聞いての通りだ。感じたままを述べてほしい。」
「残念だけど……。」「続行は……。」それぞれが胸の内に無念を押えている。
「皆んな御苦労だった。隊長として、この天候、再延期できない日数、L・Oの病気を考えると、中止せざるをえない。BC設営以来長期にわたり、本当に御苦労だった。

気力・体力もあり、食糧もある。あと数日間頑張って頂上直下の岩壁に手を触れてみたかった。思いは皆同じだろう。

八月二八日

「登山中止」を決めた途端、今日は晴れ間が見えてきた。このまま下山するにはなんとも心残りだ。二人で雪洞を抜けだしC4の途中にある岩場にたどりつき、これが最後であろうハーケンを思いきりたたきこみ、いままで大事に取り扱ってきた会旗を記念に残して、後髪引かれる思いでC3へ下った。

九月一日

今日で長かったバインターの生活と別れ、それぞれの思いを残して帰国の途へ。ビアフォ氷河から振り返ると、バインターは人間を寄せつけぬかのように、ガスが深く立ちこめていた。

苦しかった荷上げ、一生忘れないであろう落日に輝いていたヒスパーの山々。

登頂はできなかったが我々はこの貴重な3ヶ月間の体験をムダにしないために、帰国してまた第一歩から出直さなければならない。再びこのカラコルムの地を訪れるために。

まとめ

何分、やることなすこと初めての隊員ばかりだったので、いくつかの失敗、誤算があった。それらを述べて見たいと思う。

「金、金」と口を開けばお金の問題が出てきた準備会の頃、日本を脱出してしまえばその心配がなくなるだろうと思っていたが、実はとんでもない間違いであった。

昨年の遠征隊とは倍以上の高いレートに隊員の小遣いをストック、あげくのはては留守本部に「カネオクレ」の連絡をしてしまった。結果的には金は使わずにすんだが情報収集の不足、甘く見ての結果であった。

「シードゥ・アテック・ラーマン」二六才、我隊に配属された陸軍大尉のリエゾン・オフィサーである。言葉や生活習慣の違いがあるにしても、彼の言動には渉外の植田や隊員達としばしば衝突、悩み、立往生してしまった。L・Oの人格、質の向上を望む次第である。最も隊にとってショックだったのはポーターの脱走であった。七名の隊員が四〇〇〇mのバインターに到着したが誰一人として高度障害を訴えず元気であった。荷上げに関しては、国内の準備段階でもH・ポーター用に装備を用意し、ラワルピンディで念入に打合せをしてきただけに残念であった。当然脱走さえなければ二日後にC1が設営でき、登山活動は大きく変わり登頂の可能性も見い

だせたはずだった。

発想から投げだしたくなるような準備期間、寝つかれなかった日々、BC入りしてから俺の出番、おまえの出番だと、喜々として山に向っていった隊員、しかしC2の雪崩、クレバスへの転落、高度障害どれをとっても危険がいっぱい、九死に一生を得た生還でもあった。それだけに大きなケガもなく全員無事に帰国出来たことは幸運だったと思う。

最後に遠征に際して御支援、御援助くださいました関係者、O・B、会員の皆様には紙上を借りまして厚くお礼申し上ます。

記　西原

当会の遭難について

前野忠保

会が発展し、より高度な技術を必要とする場合、事故が起きる危険をさける事が出来なくなり、負傷者ですむ場合ならまだしも死亡となると家族の悲しみは大変なものです。

入会以来の死亡事故三件について、其の時々の事情を、私が知ることが出来たことを卒直に書いてみました。

昭和二三年一一月二三日

三ツ峠地蔵ルート（当時会長　夏井建之氏）

横田君とは親が友人であり、私達は子供の時よりの親友でありました。彼は一人っ子で、二人でよく丹沢周辺の沢を登り、会へさそったのも私でした。

遭難する一週間位前に私の家に来て、三ツ峠の岩登りに行くと云うので止めましたが、「今回はぜひ行きたい。又、借りた金を返す。」と金を出したので、未だ給料日でもないので変に思って、金の出所を聞いたら「カメラを売った金だ」と置いて行きました。

又、私が三ツ峠行を止めたのは、彼の両親の事を考えての事でしたが、彼の技術であれば、まさか墜死するとは思っても見ませんでした。

現場には、会員の皆様が多数出動して下さって、友人として今もありがたく思って居ります。

一人っ子でもあり、両親の事を思うと、今後会員の死亡事故を、出来るだけ避けなければならないと、自分なりに考える様になりました。後日、天狗の踊場に遭難碑を全員で立てました。

The Report of The Asagiri Alpine Club

ASAGIRI

1932-1982